

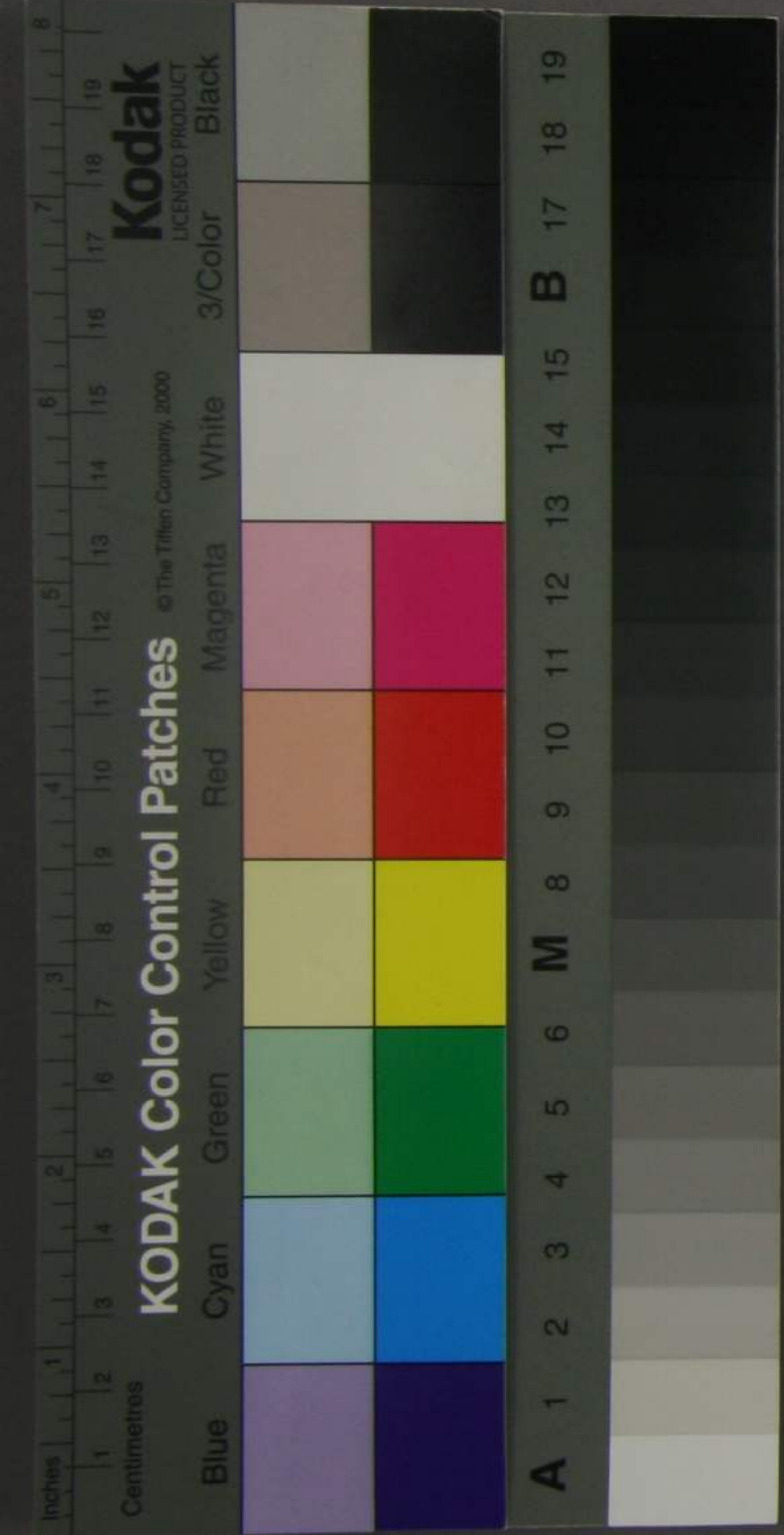
114  
A2552

明治三十年勅令第百二十三號廢止建議

安業ルニ夫レ憲法ヲ擁護シ正義ヲ採擇スルハ則堂々タル公堂ニイリ  
私議曲解シテ紕僻ヲ遂行スルハ佯々私黨ニイリ既往藩閥内閣ノ施為  
動モスレバ輒々違憲ノ行動ヲナシ敢テ悼ル必アニサリシハ天下聲ヲ齊  
フシテ憤ヲ發セシ所ナリ現内閣ガ憲政黨ニ由リテ組織セラルヤ天下  
拳ツテ望ヲ囑シテ之ヲ迎フルモ亦所以ナキニ非ザル也抑憲法擁護ノ  
道ヲ講ズベキモノ新政府ノ施設亦太見ルベキモノアラム而シテ司法官  
保障ノ制ヲ堅ウシ法治ノ實ヲ舉グルハ憲法擁護ノ道ニ於テ則下急  
中ノ多急ナルモノアルヲ信ズ蓋シ私黨紕僻ノ施措ハ今ヤ全ク憲法ノ大  
典ヲ破却シ私黨ノ跳梁ヲ以テ司法部ノ神聖ヲ汚ス弊實ヲ發キタレバ  
ナリ治房閑地ニ在リト虽モ邦家ノ為メ之ヲ黙スルニ忍ビズ敢テ衷心ヲ  
披瀝シテ言フ左右ニ進メムトス

大正十一年四月  
大隈侯爵印

2185



前内閣ノ末路ニ當リ本年六月廿日發布セラレタル勅令第百二十二號  
判事檢事官等俸給令中改正ノ件大審院乃至區裁判所ヲ通ジテ  
定員ヲ設クルガ如キハ蓋シ亦憲法ニ違ヒ裁判所構成法ニ悖ルイ甚  
シキモノナリ宜シク速ニ廢止セサルベカラズ何ヲ以テ爾カ言フトナレバ攝  
成法第五條ニ曰ク各裁判所ニ相應ナル判事ヲ置クト是ソノ各廳ニ  
就テ定員ヲ設クルノ謂ナリ法文既ニ各ノ字アリ誰カ本條ヲ以テ總  
通ノ定員ヲ設クルヲ得ルモノト言ハシ是レ該勅令ハ明カニ攝成法  
ニ違フモノナリ又司法官ノ不羈獨立タルハ憲法第五章第五十七  
條乃至第五十九條ノ保證スル所ナリ司法大臣ガ之ニ退職ヲ命スル  
ハ唯大審院又ハ控訴院ノ總會ノ議ニ決スルヲ待ツアルニ又裁  
判所判事ノ定員ハ攝成法ノ規定ニ遵ヒ各廳ニ制限ヲ立テ以テ  
容易ク濫補スルヲ許サル所ナリ故ニ法定ノ資格ニ因リ職ニ大審

院又ハ控訴院判事ニ補セラレタルモノハ其廳ノ總會ヲ組織スルニ於テ特  
殊ノ權能ヲ有シ敢テ或ハ侵サルルナシ是レ其憲法ニ基キ  
爲政者ノ暴カニ左右スルヲ得ザラシム所タラズンバアラズ今ヤ  
則否ラズ各廳ノ定員ヲ破却シ以テ總通ノモノトナセシナリ  
夫レ斯ノ如クニバ偶ニ司法大臣ノ忌諱觸レ又ソノ私ヲ濟サントスル  
アラシ乎大審院又ハ控訴院ノ總會ヲ開カシムルノ前ニ當リ擅ニ判  
事員數ヲ増減シテ附從ノ徒ヲ驅リ以テ多數ヲ制スルヲ得ベ  
キハ多辯ヲ要セザルナリ如此ニシテ恣ニ判事ヲ退職シテ裁判ヲ  
左右セシムルヲ得ベクニバ法官獨立ノ實ヲ喪シ法律制定ノ果ヲ  
失セン是レ實ニ金甌ノ底ニ漏孔ヲ穿ツモノ保障ノ制千章萬條  
比皆此一欠缺ニ破ラル誰カ之ヲ違憲ニ非ズト謂ハシヤ  
人或ハ曰ン此改正勅令タル其應用是ノ如ク猛ナルニ非ズ且交互共

通ノ便ヲ開クニト豈夫然ラシヤ之ヲ便スル仍ボ方アリ現ニ憲法及攝  
成法ニ違戾シ當ニ專横ノ器ヲ資シ得ベキ嫌アルモノ歟ニゾ之ヲ設  
クルヲ必セン是只遁辭ノミ苟モ眼識アルモノ誰レカ其目ヲ掩フテ鈴  
ヲ盜ムノ所爲タルヲ着破セザラン若シ之ヲシテ必心アベクバ將タ何ヲ  
カ及心アベカララン況ニマ道路説ク所ヲ聞クニ這般ノ改正ハ適ニ是ヲ  
行使センガ爲ナリシト豈戒ムザルケンヤ今マ法典ニ實施セシ改正條約  
ノ實行亦近キマリ外人ノ我法權ニ服スルニ當リ法官ノ獨立如斯  
ソレ除ニシテ而シテ尚司直ノ超高ヲ望ム亦過タズマ而シテ内外治  
下臣民ニ對シ亦慚愧ニ堪エケンヤ

嗚呼前内閣既ニ天下ノ輿望ヲ失墜スルマ久シ而シテ遂ニ大政ヲ致  
ニ際シ又此毒ヲ流セリ之ヲ責メント欲ルモ及ズ今マ憲政黨朝ニ立  
チ憲法ヲ擁護シ普ク正議ヲ容ル廟謨應ニ如此違憲北月法ノ

勅令ヲ廢スルニ各ナラザルベキヲ信ズ仰ギ願クハ攝成法實施當時  
ノ判事檢事進級條例ニ復シ憲法ニ遵ヒ以テ法官ノ獨立裁判  
ノ鞏固ヲ保全シ以テ内外臣民ノ依信ヲ失墜セラレザラン一ヲ  
謹テ建議ス

明治三十年七月廿五日

休職判事男爵北畠治房

司法大臣宛

同去大且覽  
和應...  
...